宗因点俳巻三点（翻刻）

乾　裕幸

一、表記は可能な限り底本通りとした。
一、略字体等は現行の漢字に似たものがあればそれを用いた。
一、印刷の都合上、長点を◎、平点を○で表記した。

一、「雪礫」独吟百韻巻

寛文五年十一月・大坂吉野屋刊『雪千句』（内題。題簽「大坂俳諧雪千句点取」）所収。同書は作者名を記さぬ「雪」発句の百韻十巻に、重頼・未得・玄札・一幽（宗因）・玖也・道寸・季吟・立圃・成安・空存が点を加えたもの。重安・保友・一幽の三吟百韻を追加する。編者は名を記さぬが、追加の発句を詠む重安ではないかと推測される。宗因の加点時期は一幽号からみて寛文二年以前と推定される。底本は東京大学付属図書館蔵竹冷文庫本。

○つくねてもうたすはいかに雪礫
　小石原よりつめた焼飯
　　礫ニ石あしく哉
　銀山の掘子ハ水をかへほして
　　ときの声をもあくるめてたさ
◎秋に逢し律の調ハ殊更に
　天とふ鳫も手もとにそ見ゆ
　　にそ見ゆ如何
　菊月の夜すから料る鼈の鳥
　　烏前の厂をかるやうニ候
　めされぬるこそ殿の御意よし
◎上下の腰もあてなる生付　ウ
　道場参りすなをなる袖
　　なるノ字ちかし
○一遍のひしりきつての廻國に

奉加すゝめて喧咤何そも
きつて二喧咤を被付候歟不好候
○神ハ宣祢かなら酒にしも醉狂ひ
ふりあふのきてさてうつ腹つゝミ
月ひとり守し古屋の古狸
軒にはゆるハ誰おもひ草
忠臣ハ露もこのまぬ色の道
○憚りなから君に御異見
○強力に姿はかりをあらためて
○世を捨てこそ順の岑入
◎平油単花より外にしるもなし
あか香いつれ焼丁風呂
二◎鶯の声にや客をよひぬらん
小竹筒に酒を持し野遊ひ
興に乗しまふ形振ハ見苦しや
○鬼に瘤をもとられぬる比
宇治集(ママ)遺二在之候歟
○女にて柳の養歯所望せり
鞠見物の公家ハ撫鬢
小弓をも引草臥て一休ミ
○口をよせぬる神子の本意なし
◎ひゝかすハこれたかからん香炉にて
惟番候歟
不断にたつる薄茶入なり
○朝勤かくるともなき仏棚
月の鼠もあれぬ用心
○米櫃のふた身にしめる不破の関
たハふ鰹魚にいとふ秋風
二ウ○移徙のあらぬ社の霜覆
一くろミぬる杉の村立
◎暮かたき日にやけて待郭公
宇頂天にも物そかなしき
君こんといひしも雨にをさへられ
○泪に袖ハ朽おしうこそ
六十までふるされぬるも因果そや
よむ經文ハ耳にしたかふ
初夜後夜に目を覚さする鐘の声
月にもかはる廣間番衆
進物のひかへ幾秋いろは假名
山ほとにつむ数の栗籾

○百姓をやめかゝる侍
◎里の名ををのか名字に頭して
　難波の芦をかりて賣喰
○おちふれて本のなしミに逢ハうし
　なれのはてこそあハれ囚人
○科なれハ讀言の葉につくされて
　爲明歟
　あやな虫はむ板間おそろし
○月影も朱をぬることの縁桀に
　露の玉しく毛氈の上
○花の下乘かけ馬の口とめて
　美景によりし小初瀬の春
名
◎參宮の道ハ別れて遅日に
　つれに似あはぬ老若ハ何
○手を曳て傾城町の前渡り
○三味線ハみな人の恋種
　錢銀を山家はいりにつかひ捨
○奉公せしか後の出かはり
○新發意も住持にすはる秋の來て
　かたふく月も西の大寺

三
◎あら玉の年子にそたつ姉妹
　つくはこ板にあそふ靈亀
◎またるゝ物ハとれからの嫁
○案内をこふても來たる文使
　門口あきて犬の長吠
　盗人の在としら木の棒を持
○また夜ふかにもたつた山伏
　鶏の声にあらそふほらの貝
◎関の戸あけよ一軍せん
　須广の浦浪もよせ手の勢なれや
　音はから〳〵鈴船の中
○慮居て來たり給ふは上つ方
　あたゝめ酒を汲る道種
　紅葉符しハしはかりの遊覧に
　惟望の心か
　月も御幸のかり屋住居よ
三ウ
　不自由さハ萱か軒端の内ならし
　堀かねの井もむさし野の邊
　鋤鍬も今ハ鎧に打直し

○やすらハてねすに念仏の声はかり
目口かはきな人の臨終
◎獄門の頸もや笑をふくむらん
今日ハ餞をいはふ年越
獄ノ字ニ如何
脂皿の丸きか中ハ相むしろ
ふたりの夜着も錦唐織
ウ
○主従も同し古郷に歸り足
◎船路より猶陸にまとへる
玉かつらの巻思ひ出られ候歟
○つしまつりねり衆の中の諍論に
○汗も鼻血もたるハ誰子そ
肩ぬかせ額をかゝへ指くゝり
○灸をすへぬる行儀あしさよ
花咲て後七日さへふたしなミ
藤色にしもよこれ下帯
付墨四十九句
此内長十三　一囲

二、胤及「花にいはゝ」独吟百韻巻

寛文年間（推定）・京都寺田重徳刊、雪肆編『俳諧統独吟集』所収。上下二冊に二十人の作者による各独吟百韻二十巻を収める。本巻はその内の一。胤及は備前国片上の医師。本名岡本仁意。延宝四年没。六十二歳。底本は天理図書館蔵綿屋文庫本。

備前住　胤及
◎花にいはゝむへ山風やあらしん気
◎あたまかきくれふるは春雨
○暁枕かへすたわけか昼ゐねて
ふんとの垣はなたらかにせす
かと高き庭の飛石とひ〳〵に
○尾ハひら〳〵と今朝黄鶺鴒
月に聞雁はとこらへおちつかた
牧木を拾ふあきのうら人
ウ
○昨日せし夜討の跡ハしら浪に
うき乱世を何にたとへん
家もなしあはれといはん方もなし
○さのゝあたりの雨のふる桶
◎駒とめて袖うち拂ふ鮓の銭

○市ハ立なり坱たつなり
水もなき旱をなんと餝广川
○さらハ御秡を海へまからふ
左迁のなけきハ春もうそ淋し
もゆるおもひややく土佐の畑
月露む足すり寺に啼口説
○あたなる児のこゝろかる石
○出ていなハへちまの皮と云やせん
二
◎うかりしいとまとるたんふくろ
酒醉をもてあつかへる狂言に
○なら法師にハ手をすりにけり
○追はらふ跡から蝿ハ興福寺
○佛のめしのくさきなつの日
○山深ミ岩井の水ハかな気にて
緑青のたゝ多き谷〳〵
木々の葉ハいつ朱の色に成なまし
○椛の下地をひくハはつあき
○大原や里も鼡も月にあれて
○我いねかねつ妹もさそ〳〵
都をハこひ茶のあつきなみたしれ

くれし形見も気もふくさ物
◎巾着の一分自慢ハない中に
いかてか鼻をはちくうかれめ
からしよりからき世いとふ竹の□(ムシ)
二ウ
萬事寸白の無心なる烋
見るそらもにかりかたまる月の雲
○はつ塩をやくけふり真くろ
○こぬひとを松ほのうらミ腹立て
○最旱向後淡路とそおもふ
明暮にミても詮なき占や算
◎終にかゝみハ出ぬうせもの
年經ぬる花の下水かえほして
大鯰とるさくら魚とる
獺も春の天をやまつるらん
礼義のあらぬ人は何そも
うすいなる□(ムシ)脛をうつ杖にして
所の守護の籠のまへをふ
三
店馬にもさゝれてけふの國廻り
のほりにしるし渡す科人
○桟は釼の山のなかハにて

木曽路にゐてる霜よ氷柱よ
麻衣綿かなあつふ入てきて
○継母にさてからるめいわく
○都をハそろりとぬけて住吉に
八幡の杉へ飛ふは飼とり
家鳩を友に呼らし塔の鳩
在所もすこき雨のふる畑
鼓し分ぬ音はあらしか山立か
夜更てそこになく右上
月の入跡ハやれさせ寺の門
燈明のあふら露もなふなる
三ウ
千貫目つむ金倉も秋のかせ
○長者の家に出す手あやまち
◎おもひ子をしかとのせたハ車よせて
よく出合珍重二候
◎気つかひ大井みちは京迄
宗祇連哥思被出候
○早川をうれしきかなや越すまし
金谷
いささらたはこ吸ん茶陰
○旦那殿花の囲居の酒ならハ
○伏見の里の春の小座頭
○初瀬山佛事に覆む鐘聞て
○いのるちきりの相手しんたり
◎物怪のうらみはつよき碁のことし
珍重二候
◎星照池に身をハとんふり
方池ノ心珍重二候
○脇さしハ月を汀にさやはしり
○露打はらひきさむ船はた
名
○苫屋にも太鼓つく〳〵かけをとり
いね〳〵とてやむし送るらん
○蜻蛉にひらりと白き紙付て
○野馬臺の詩に不審かす〳〵
其名世に笠あそんとは明し
人にはつけよ歸洛わひこと
潮風につれてとつ〳〵と行そとハ
○のかる難波のミつの悪道
○これや此海渡る船にはしり者
○飛厂か音も痔やいたむらん

○前髪か物おもふ宿の萩の露

◎あなたの娘まぬけ小すゝき

よく似合たる媒二候

山の神我にハりん気夕月夜

おほつかなくも鰌ミるらし

ウ

磯際に物ふミたつる足のうら

○是なん音にきくたゝら濱

○戦ひの跡とて白き骨はかり

◎軍配團やれてすてけむ

土用干校割物の数たらて

鳥散なものゝ寺門にや有

○花の香に魚を煎る香やたくふ覧

餅の子ハけふ欺冬の色

愚墨五十一句

此内長十一

仁意獨吟々畢　西翁判

三、晒求「月の扇」独吟百韻巻

写本『談林俳諧』所収。同写本には、この巻のほか、鎌倉三吟・宗因独吟百韻・似春独吟百韻・京三吟・山水独吟十百韻を収める。いずれも延宝期成立の俳諧であることや俳風から、本百韻も延宝期の成立加点であると考えられる。晒求については未詳。底本は天理図書館綿屋文庫本。

独吟　松野氏　晒求

◎月の扇御箱入や上々吉

乾坤の箱入上々吉たるへし

○へき一枚にわたる涼風

◎菓子ハ前茶ハ三服の夏闌けて

○世間はなしも始にけり

編笠も下におかれぬ所あり

○片尻かへる半畳の上

珍重

◎莨菪切宿ハあまたに借屋住

たしかな證據爰に一本

◎山境松風はかりや殘るらん

○我持分の嶺のしら雲

○狹箱や高間の寺の下男

○唯今頓死南無阿弥陀仏

門火燒いつれ跡ある薄けふり
○乘物一挺既にゆふくれ
◎秋風を引に付ても送り醫者
○加減して數萩の下露
御時分を告る砌に虫の聲
夕食過て其後の月
京都をは霞分しか旅の末
◎割賦に成て歸る厂金
○咲花も所書にや殘るらむ
買物何〳〵先柳樽
○僕ひとり頼みをかくる柴の庵
◎捨てもおかれぬ我衆道すき
○智（ママ）音狀とれは俤にたつ姿
夢はやふれて殘る印判
硯箱明る佗數かねのこゑ
○連歌百韻寒氣立也
◎白粥に雪を廻らすかよひ盆
◎ふらぬ霜見る皿の燒塩
しほらしく覚え候
○身代は侘とこたへて須广の月

浦はの秋をよはなしの景
○色上戸臭の紅葉もなかりけり
喧嘩やふれてあとの山風
肌を着る其時ミねの雲ちきれ
○暑さつれ行く白雨の空
○是に過し立よる木陰の夏の月
◎老後のおもひ出にきく郭公
名のれ〳〵と責られて終に名のりたるにや
○隠居所に臥かとすれは寐覚たり
夜分ちかし
枕下にはおくきせる竿
○病証（ママ）を先見脉に考て
ある時は恋の山賤もあり
◎歌舞技（ママ）狂ひ扨人間に遊ふ事
よそに利くひのかね言の末
◎手形にも件のことく名ハ立て
○箱根といつはかよひちの關
江戸下り扨押ほとに〳〵
○千石舟のあとのしらなみ
気のつまる磯山嵐花の風

さくらみたるゝ當句むつかし
○庭と居所の打越を見れは薄霞
上座末座にめくる春の日
○運來る茶臺に月や通ふらん
○銀四五匁をく今朝の露
○会釈の秋風も立旅の宿
○送る木の葉の輕き荷俵
山里の使は來り馬に鞍
ハ嶌のそれ殿まいる切紙
○指引の殘りの海の不埒にて
物のきりめのかなし年なみ
○通ひ路と二の足ふんて揚屋町
○天晴をのれ恋はくせもの
◎押ならへ無手と組てころひ合
蒲團のあひに泪こほるゝ
○御別れの駕籠に思ひやはつむらん
○古郷は跡に気さす小便
ましくさと寐入せもせぬ嶺の坊
澗庭の松風世は謡也
◎小鼓の一声の秋を催ふして

おとろき申候
ぬく片袖にかゝる白露
月の友そこを引なといふ侭に
又折合申候
もつて參りてちやうと盃
密通やくさひ〳〵も今しれた
◎はこふんて行別路の空
たる泪かゝる半紙に二三枚
○恨不足を聞書にして
別てハ花見の時のあひ狂ひ
○御異によし鴛のこゑ
◎家老めく人ハ頭の雪消て
○義經重忠山は春風
分別くさく聞え申候
○見渡せは一順箱に嶺の袞
珍重
幸宿に棹鹿の聲
○御尋に留主つかはせぬ秋の月
豆腐こんにやく芋の調菜
○献立の意趣を離れて渡厂

うしろを見れはちる菊の露

○灸の点先山風やをろすらん

初六中八なひくうき雲

端女郎望にて買てうき別

○おもひの数や壱貫弐百

○懸の末ハ萬人講に成にけり

○なミたハ袖にむすふ何庵

○あハれ成物語一ツ忘れたり

○東の方に道行ふたり

冨士山の雲にはっちの磬す也

○世をくはんすれはぬり笠の雪

散行ハふしきや今迄有つる花

○とり〳〵化粧妻乞の猫

きのふ寒けふ明渡る朝日影

○一ツ〳〵ミな〳〵年頭の禮

六十弐点之内長十六句

宗因在判

（いぬい　ひろゆき／本学教授）